

第 37 回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会

「かたち」再考 一開かれた語りのために—

(The 37th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property Reconsidering “Form”: Towards a More Open Discussion)

本シンポジウムでは、人々の営みのなかで生み出される「かたち」を対象とします。立体感、スケール、色調、マチエール。あるいは文学における文体や踊りの所作なども広義の「かたち」に含まれます。

「かたち」にはさまざまなものが込められています。いつ頃、どのような人が、どのようにしてつくったのか。どのように受け取られ、どのように伝えられてきたのか。

その特徴、材料・技法、何らかの痕跡をつぶさに観察することから手がかりを得て、こうしたことを明らかにしようとする試みが重ねられてきました。有形の「かたち」をあつかう分野、たとえば考古学や美術史学では、「かたち」そのものにもとづく編年構築がある程度完了し、「かたち」の変遷が理解されるに至りました。しかしその方法にも限界があるようで、現在では「かたち」の背後にある機能や利用形態といった側面に目が向けられるようになってきました。

こうした研究が豊かな成果を生み出した反面、「かたち」の問題が置き去りにされがちになるという結果ももたらしました。そこで本シンポジウムでは、これまでの成果を踏まえつつ、いま一度、「かたち」の問題に立ち返ってみたいと思います。「かたち」に注目してその特徴の理解を目指すのは、そこに文字史料には見つけ得ない人の営みを、確かに見出すことができるからです。

「かたち」からしかわからない物と物との関係、人と人のつながり、物と人や場とのつながりを浮き彫りにすること。「かたち」そのものがもつ力に改めて目を向けること。こうした目的のために、「かたち」そのものをいかに研究対象として、議論の俎上にのせていくかが問題となってきます。

本シンポジウムでは、美術史学、考古学、建築史、芸能史など、「かたち」をあつかう諸分野の方法論を集めて討議することを試みます。「かたち」を議論するための共通の地盤を探りつつ、開かれた有効なアプローチの方法を模索するなかで、「かたち」そのものがもつ力に迫りたいと思います。

日程：2014（平成 25）年 1 月 10 日（金）～ 12 日（日）

会場：東京文化財研究所セミナー室（東京都台東区上野公園 13-43）

参加者数：312 名（3 日間の延べ人数）

1 月 10 日（金）

趣旨説明

皿井 舞（東京文化財研究所）

基調講演 対談

イケムラレイコ（アーティスト）

田中 淳（東京文化財研究所）

生まれてくる〈かたち〉

[Session 1]: 群れとしての「かたち」

セッション趣旨説明

江村 知子 (東京文化財研究所)

	発表者	演題
1	サイモン・ケイナー (セインズベリー日本藝術研究所)	「先史時代からみた「かたち」の概念—土偶や縄文時代の遺物の観察を通して」(The Idea of “Form” from a Prehistoric Perspective: Observations on Dogu and Other Jomon Artefacts)
2	高桑 いづみ (東京文化財研究所)	「「くり返す」ということ—音楽の「かたち」と変化する伝承」(Refrain in Music: Creating and Changing Musical “Forms” Over Time)
3	ユキオ・リビット (ハーバード大学)	「蟠龍図の「かたち」と行為」(Ascending Dragon Paintings: “Form” and Act)
4	小沢 朝江 (東海大学)	「近代日本の行在所にみる様式の創造」(The Creation of Style for Modern-Era Temporary Imperial Architecture)

セッション討議

司会: 江村 知子 (東京文化財研究所)、荒川 正明 (学習院大学)

1月11日(土)

[Session 2]: 個としての「かたち」

セッション趣旨説明

塩谷 純 (東京文化財研究所)

	発表者	演題
1	小林 達朗 (東京文化財研究所)	「美しい術—国宝千手観音像の場合」(Manifesting Splendor: The National Treasure Thousand-Armed Avalokiteśvara)

2	内呂 博之(ポーラ美術館)	「かたち」への挑戦—岡田三郎助と藤田嗣治」 (Challenging “Form”: Okada Saburosuke and Fujita Tsuguharu)
3	大島 徹也(愛知県美術館)	「ポロックをポロックとして見る—ジャクソン・ポロックのオールオーバーのボード絵画」 (Seeing Pollock as Pollock: Jackson Pollock's All-over Poured Paintings)
4	渡部 泰明(東京大学)	「歌の(かたち)—源俊頼の方法」(The “Form” of Waka Poetry: Minamoto no Toshiyori's Method)

セッション討議

司会：塩谷 純（東京文化財研究所）、藤川 哲（山口大学）

[Session 3]: 「かたち」を支えるもの

セッション趣旨説明

綿田 稔（東京文化財研究所）

	発表者	演題
1	メラニー・トレーデ(ハイデルベルク大学)	「八幡縁起のローカリゼーション」(Localizing the Hachiman engi)
2	崔 公鎬(韓国伝統文化大学校)	「器・社会的形態・文明の記憶」(Vessels: Manifested by Society, Bearers of Cultural Memory)
3	塚本 鷹充(東京国立博物館)	「塚本 鷹充／東京国立博物館 中国絵画史における「人格」と「かたち」 —呉彬「山陰道上図巻」と価値評価の構造」 (Between “Virtue” and “Form” in the History of Chinese Painting: The Structure of Critical Evaluation, with a Focus on Wu Bing's Road to Shanyin)

4	桑木野 幸司(大阪大学)	「記憶のかたち—コスマ・ロッセッリ『人工記憶の宝庫』(1579年)における天国と地獄の表象」 (The Form of Memory: Representation of Heaven and Hell in Cosmo Rosselli's Thesaurus artificiosae memoriae (1579))
---	--------------	--

セッション討議

司会：綿田 稔（東京文化財研究所）、佐藤 直樹（東京藝術大学）

1月12日（日）

ラウンドテーブル（総合討議）

司会：田中 淳（東京文化財研究所）、山梨 絵美子（東京文化財研究所）

会場：東京文化財研究所会議室